

「大学で学ぶ」



浅原 利正

(広島大学 学長)

一・はじめに

平成二十一年、一八歳人口約一二二万人の半数の六一万人が四年制大学に進学し、専門学校などを加えた高等教育機関に進学するものは七五%を超える時代になった。一方、国公私を含めた総大学数は七五〇校を超え、志望校を限定しないならば、まさしく「大学全入時代」を迎えている。三五年前（昭和五十年）、一八歳人口が一五六万人で四年制大学進学率が二七%、四二万人であったのと比べて、一八才人口が七七%に減少しているにもかかわらず、四年制大学への進学者は一・五倍になっている。昭和五十年の「天声人語」に、学歴は就職に有利にはたらかない、という話題と同時に就職難について書かれていた。現在も二〇〇八年の世界規模で発生した金融危機により、企業の業績は悪化し、雇用は削減され、企業の倒産も増加し、大学の出口問題が一層深刻となっている。大学を卒業した学生が就職できないという深刻な社会問題は続いており、昭和五十年か

ら変遷はあったにせよ、大学生の就職難は未だ解決していない。そのためか、就職に有利な有名大学から一流企業へという競争は益々激化しているといえる。

また、高等教育機関への進学率が七五%を超える時代を迎えて、高校での学習の内容は益々受験に焦点が絞られ、受験科目が偏った大学では「分数のできない大学生」も出現することになる。「大学全入時代」を迎えるなかで、高校が大学の予備校化するような事態となっていることは憂慮するべきことである。高校教育、高接続、大学入試のあり方も考えなくてはならないが、ここでは大学で学ぶことの意義について考えてみたい。

二．大学で学ぶこと

大学入学後、教養教育を開始すると、「何の役に立つのですか？」という大学生の声を聞く。高校のとき受験に役立つ科目しか学習してこなかった学生が、大学で専門教育以外の教養教育科目に接したときに不自然な感じを持つ。高校での大学受験勉強と同じ感覚で、大学は就職のための専門教育の場であるという認識は完成されているように思え、いわゆる大学教育の意義を理解させることが難しいという事態をどの様に捉えればいいのかであろうか。

私は大学教育について「高校までは正解のある問題に対し、その正解に到達する方法を学習し、大学では未知の課題に挑戦する」というように話して、その違い、大学で学ぶことの意義を学生に伝えている。大学では知識 knowledge を獲得すると同時にその知識を活用し、体験から学び、考える、知恵 wisdom を身につけることが必要である、と話している。更に、大学では「人類の課題解決に向けて、未知の課題に挑戦する」という夢を持ち、高い志を掲げて、充実した学生生活を送るよう呼びかけている。

大学を卒業したら社会人として、個人あるいは組織の一員として、社会活動に参加して社会貢献に取り組むことになる。そのために、社会人としての基本的な素養を身に付けておく必要がある。それが教養教育である

と考える。中世、ヨーロッパでは深い教養に関わる思考の歴史があった。当時、教養教育とは文法、修辭学、論理学（三学）、算術、幾何、天文学、音楽（四科）、の七自由科であり、古来、「どのような教科（内容）が人間を人間にするのか（教養がある）」が考えられていた。現在ではこれらの教科に追加するべきものもあるが、基本的な考え方は変わらない。もちろん、そのようにして学ぶ教養が、社会人としての素養として、大学の四年間で完成するものではなく、むしろ社会に出て、様々な体験を通じて身に付けていくものであろう。しかし、感受性の強い二〇歳前後の若者が、この時期に社会に出るための準備をすることの意義は大きい。その理由は、この時期の体験は印象強く、終生記憶に残るものであり、その体験は素直に受容され、物事の判断の原点として身に付き、その後の人生にしばしば活かされることになるものだからである。

専門教育以外に大学で学ぶべきものはある。社会に出て、様々な困難に遭遇したときに、それを「克服する力」は極めて重要なものである。それらを身につけるためには、集団生活（地域社会）の経験の中で、周囲を気遣いながら自分を主張していくことを学習する。地域社会の中で、自分の立場について考え、地域社会で生きていくための知恵を身に付けなければならぬ。大学生くらいになると、そのような社会ではしばしば自制することは必要であろうし、相手に対する思いやりが求められる。その組織、地域社会がどのように活動しているのか、状況変化を分析、予測し、社会の行く末を見据えて、その中で自分の置かれている立場を理解し、自らに求められていることを正しく認識し、行動することが必要である。

このような人間力を身につける学習は専門教育の中でも決して不可能ではない。しかし、そうだからといって専門教育のみのプログラムにしてしまうと、学習は偏りがちになる。専門尊重のプログラムでは、偏った経験、考え方に傾きがちになり、幅広い知識、知恵を身につけることがおろそかになる危険がある。また、若いときだからこそ、一つ一つの経験を大切にしなければならぬ。当然のことながら何でも成功体験になるはずはなく、むしろ経験不足故、挫折や失敗することのほうが多いのではなからうか。そのような失敗や挫折は学習機会として重要であり、学ぶことは多い。このような学習機会の積み重ねが、人間力のある社会人を育てる

貴重な要素であろうと考える。

広島大学では四年前から「フロントランナープログラム」を開始した。大学が多少の資金を用意して、学生が自分たちのアイデアで、学外に出向いて、自らが主体となって社会活動に参加するというものである。ユニークなプランもあったが、同時に様々な苦労を経験して、学生が成長してゆく姿を垣間見た。「無人島に木を植える」、「町なかで映画祭を開催する」、などのさまざまな企画があったが、総じて計画通りに実現しない。周囲の意見を参考にしながら、失敗を重ねて、目的を達成する。そのような苦労の体験は、高く評価したい試みであったと思う。教養教育に資する取り組みであると思う。

大学の教育には教養教育と専門教育のバランスの取れた融合が求められる。

三、社会が求めている大学教育

民間企業から「卒業してすぐに役に立つ人材を育成するべきである」と大学側に注文がつく。すぐに役に立つ人材とはどのようなものであるか。企業のシステム、目的を理解し、直ちに第一線で活躍する企業人として有益な人材、という意味に理解される。多分、企業では入社後すぐに何らかの研修を経験させ、その後現場に配属させるはずである。そのような研修により、それなりの企業人としての心構えや行動規範は身に付くのであろうが、現場にすぐに溶け込むことのできる人材を要求しているわけではないと思われる。なかには研修を重ねても、企業人としてなかなか環境になじめない者もいると思うが、多くは次第に順応してゆくことができるものである。もちろん、大学での授業などを通じて、社会人としての心構えを育成することの限界は感じており、就業前のインターンシップの重要性については理解できる。そのような機会を積極的に作ることで、教育の向上を図り、社会からの要求にこたえていかなくてはならないと思う。

最近のグローバル化社会の進展により、多様性を理解でき、国際社会で活躍できる人材育成も求められてい

る。そのために肝要なことは、日本固有の文化を理解し、それを身に付けることである。国際交流が進むにつれて、日本人としての *identity* が求められ、日本人に相応しい言動が期待されている。在学中にさらに日本固有の文化・芸術などについて学んでおいて欲しいと願っている。

四．まとめ

大学においては、複雑性を増してゆく社会、それに国際化社会の進展に対応して、多様性と寛容を理解し、高い学識を有し、地域社会の一員として自らの立場をわきまえて、自分に課せられた課題解決に積極的に取り組むことのできる心豊かな人間を育てようとしている。

大学生活の期間が以上述べた学習をすべて可能にするとは思わない。ただ、そのような学習の方向付けをししておくことは重要であると思う。学生自身も身に付けるべき目標をしっかりと認識して、大学での生活が将来の人生にとって有意義なものになるよう取り組み必要がある。